



こども歴史なぜなに? 相談室



「よみがえる草戸千軒」のお家では、 どうしてご飯が漆器に盛られているの？

このあいだ、ぼくが初めて晩ご飯のしたくを手伝っていたら、お姉さんに大笑いされました。その理由を、「ご飯は木のお椀に入れるものじゃないのよ、ご飯茶碗に入れるのよ。」と言っていました。

でも、広島県立歴史博物館の「よみがえる草戸千軒」では、どの家でも漆塗りのお椀にご飯が盛ってありました。それに、出土品を並べた「食べる」のコーナーには「食膳具の復元」があったけど、ご飯が盛れるような焼き物はありませんでした。

草戸千軒が栄えた中世と今とでは、ご飯を盛る器は違っていたのですか？

現代の私たちにとって、漆塗りの器はお正月や結婚式などの特別な機会に使う道具にもなっていますが、中世にはごく日常的な器として使われていたようです。漆器の材料となる木材や漆の木は、身近なところに豊富にあったと考えられますし、草戸千軒町遺跡からは、漆塗り用のへらや刷毛などの道具がたくさん出土していることから、「塗師」と呼ばれる漆塗りの職人は全国各地で活動していたようです。また、絵巻物に描かれた食事の場面を見ても、漆器がさまざまな人々の食事の器として使われていることがわかります。



「草戸千軒 I 展示室」、「食べる」のコーナー、「食膳具の復元」より



「草戸千軒 I 展示室」、鍛冶屋の食事

一方の焼き物の器ですが、中世に釉薬(うわぐすり)をかけた焼き物を生産していたのは、現在の愛知県から岐阜県にかけての地域で生産された「瀬戸焼」と「美濃焼」だけで、中国などの外国から輸入した「青磁」や「白磁」が多く使われていました。

こうした外国産の陶磁器が大量に日本国内で消費されていたことが、最近の中世遺跡の発掘調査によって明らかになってきました。したがって、外国産だから高級品とばかりは言えません。しかし、国産品にはない独特の色彩や光沢があることから、中には美術品として特別な価値をもつものがあつたことも確かです。そこから、茶の湯や生け花など、多くの人々が集う特別な機会に使われることが多くなっていったようです。

漆塗りの椀も、陶磁器の茶碗も、どちらも現代まで使いつけられている道具ですが、そこに与えられた役割はそのまま引き継がれているわけではありません。同じ形の道具でも、与えられた意味や役割は時代によって違っていたのです。

(学芸員 周々木朝香)